

他人事ではない身近な問題

南丹市立園部中学校 3年 高屋 瞳華

「らち」皆さんはこの言葉を漢字で書けるだろうか。私は教科書を見ずには書くことができなかつたが興味を持っていたり、身近な問題として考えていたりすれば書けたはずだ。例えば、友達は興味のある芸能人の名は漢字で書ける。もっといえば自分の名前は難しい字でも書ける。拉致問題もそんな身近なものになるまで考えるべきなのではないだろうか。

私は拉致問題を、社会の授業で見た「めぐみ」の映画で深く知った。その映画を見る前、「拉致問題について知っている人？」という問いを先生は私たちに投げかけた。でも、手を挙げたのは三十一人中二人。私は、説明する自信がなかつたので手を挙げなかつたが、知っているつもりだった。でも、映画視聴後は反省した。「拉致問題は誰かが不幸にもどこかへ連れていかれた出来事」そんな私の軽い認識は吹き飛んだ。これは、人の尊厳を損ねる重大な問題であり、このグローバル社会を生きる私たち一人一人の問題であると。

映画の中で印象的なシーンがあった。街頭で配られためぐみさんのビラに目もくれず、そのビラを踏んで歩く人の姿だ。心の底からめぐみさんの帰国を願い、運動を続けている人たちにとって、この行為はとてもショックなものだ。単に紙を踏みつけられたのではなく、自分の心まで踏みつけられたような悲しみと落胆を覚えられたらう。

めぐみさんが拉致された当時の日本では、今ほど拉致問題に関心がなかつたのだろうか。私はこのことが引っかかり家族に話をしてみた。すると、母や祖母の口から「横田めぐみ」さん「蓮池薫」さんの名前が出てきて、多くのことを教えてくれたのだ。近くにいた小学生の弟でさえも「何の話か分かるように説明して。」と興味を持ってくれた。「家族で知っていることを伝え合い、共有し、知れた事。」このことは拉致問題解決の一步となったように感じた。だから私は「拉致問題」について『興味関心を持つこと、知ること』が大切だと思う。そこから『伝え合う、広める』ことで拉致問題は『身近なもの』となるだろう。そうすれば皆の心に『この問題を決して許さない』という思いが大きく芽生え、解決に導いてくれるに違いないと思った。

人にとって最も悲しいことは、人から関心を持たれず、自分は孤独だと感じることだ。薫にもすすがる思いでビラを配っていた人々の悲しみを払拭する方法は、この問題の解決以外にはあり得ないが、せめて『拉致問題を他人事でなく、常に自分の事のように思い、当事者の気持ちで考える心』を持つ事で、悲しみを背負う人々の気持ちに寄り添いたい。そして署名活動やブルーリボン運動に積極的に参加し、その悲しみ、その心を身近なところから世界中に広める一人となり、この問題の解決を動かす一步となっていきたい。